

小学校

平成 9 年 度

教育研究員研究報告書

図画工作

東京都教育委員会

平成9年度

教育研究員名簿 (図画工作)

分科会	地 区	学 校 名	氏 名
A 分科会	中 野 区	桃 園 第 三 小	川 原 志 麻 子
	杉 並 区	桃 井 第 五 小	前 田 文 生
	豊 島 区	日 出 小	笠 原 賢 二
	板 橋 区	大 谷 口 小	堀 内 長 昭
	練 馬 区	豊 玉 小	阿 部 智 英 子
	八 王 子 市	第 三 小	天 野 正 枝
	武 蔵 野 市	第 二 小	○鳥 越 恵 都 子
	B 分科会	世 田 谷 区	山 野 小
足 立 区		中 島 根 小	西 野 好 子
葛 飾 区		原 田 小	稲 川 忠 男
江 戸 川 区		第 五 葛 西 小	森 脇 勝 美
八 王 子 市		第 四 小	平 井 忍 郎
江 市		狛 江 第 五 小	○湯 本 一 郎

○世 話 人

担 当 教育庁指導部初等教育指導課指導主事

岡 本 昌 己

目 次

I	研究主題	2
1	研究主題設定の理由	2
2	研究の構造図	3
II	A分科会報告	4
1	A分科会の概要<子どもの多様な感覚を呼び起こす題材の工夫>	4
2	実践事例	5
3	研究授業	6
(1)	「光と水であそぼう」	6
(2)	「ねんどでつくろう」	8
(3)	「版画コラージュ」ープレス機を使ってー	10
4	主題に迫るための視点一覧表	12
III	B分科会報告	14
1	B分科会の概要<子どもの多様な思いを生かす指導法の工夫>	14
2	実践事例	15
3	研究授業	16
(1)	「音・風・におい・・・を窓ガラスに描こう」	16
(2)	「しばって、しばって、チョウ（長）布キレ〜！」	18
(3)	「魔法のタネから・・・が」	20
4	主題に迫るための視点一覧表	22
IV	研究のまとめと今後の課題	24

< 概 要 >

本研究は、子どもたち一人一人が自分の思いを深め、表現の喜びを味わうことができる授業の工夫を研究主題とし、「子どもの多様な感覚を呼び起こす題材の工夫」においては、主に視覚と触覚を手がかりにして、子どもたちの造形的能力を育成することを目指した。

「子どもの多様な思いを生かす指導法の工夫」においては、子どもの興味を持続させながら、個々の特性や感覚の違いを尊重し、その子なりの思考過程を感じ取って支援を進める指導法の在り方について研究を行った。

I 研究 主 題

自分の思いを深め、表現の喜びを味わうことができる授業の工夫

1 研究主題設定の理由

現代の子どもたちは、とかく昔の時代と比較され、“今の子どもたちは・・・”とあまり良い言い方をされることがない。しかし、社会の変化とともに、生活環境も変わるなか、子どもたちは、いろいろな事物や現象に興味や関心をもって、純粋に受け止めながら内からのエネルギーを満ち溢れさせている。

ただ、様々な価値観が混在することにより、自分自身を自己規制しながら他者や社会のなかで協調することを求められることが多く、自分を見失いがちになる一面も見受けられる。

このようななか、図画工作教育によって、文化としての美術や技術を伝承するだけでなく、子ども自らが美しさや力強さなどのよさを体感し、より人間的に大きく豊かに成長する動機となり、そのことによって生きる喜びを味わうことができれば、それはすばらしいことである。

たとえば、自分の内面を形や色で表したり、自分の好みに応じていろいろな発想を思い浮かべたりすることによって、自分という存在に気づき、他者を理解しつつ自分も大切にすることになることができる教科の一つであるということである。

一人一人の子どもたちが自分の思いを生かし、様々な夢を実現させたいと願っている姿勢を教師が心から受け止められる授業の工夫が必要となってきた。

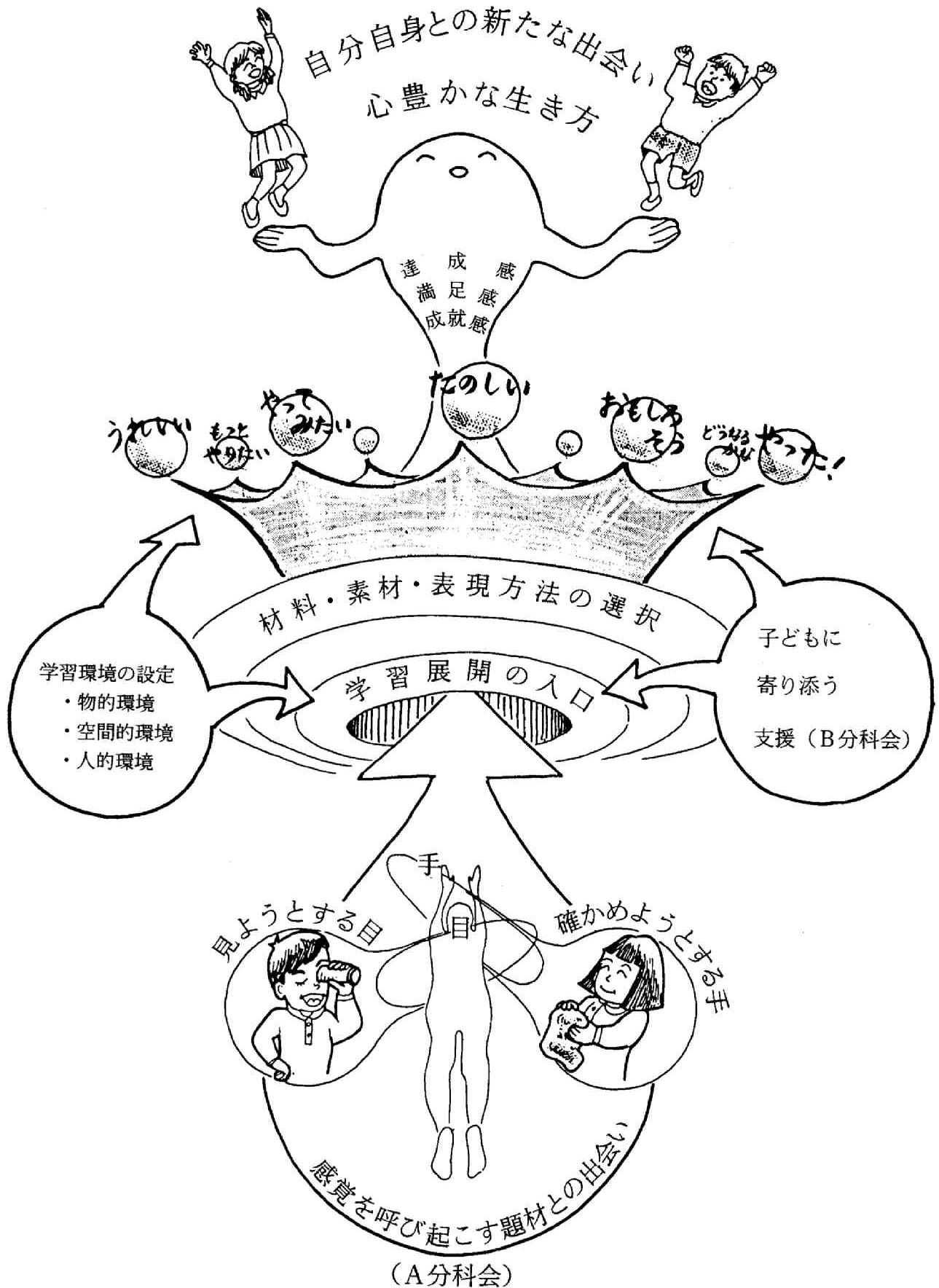
そこで、充実した授業を展開するために、子どもがもつ多様な思いを大切にし、さらに広げ深めながら表現することの喜びを味わわせることをねらい、二つの視点から研究を深めた。

『表現の喜び』を味わうには、子どもたちの感覚を十分に揺さ振り、刺激を与えていくことが必要である。コンピュータゲームなどの仮想現実の世界に興じる子どもたちの姿は、本当の意味の感覚を育てているとは言えない。実物を見ているようで、実は見ていないという錯覚が生じやすくなる。手の感覚によって直接触れて感じたり、様々な方法で視覚を刺激したりするという直接的な体験を手がかりとすることによって、子どもたちの本来もっている多様な感覚を呼び起こし、豊かな美意識や造形能力を育成することができると考えた。 < A分科会 >

また、子どもの興味を引き付ける題材の提示という「導入時」の工夫だけで子どもたちに活動させるのではなく、子どもの特性や感性の違いをしっかりと捉え、個々の子どもに適した思考過程を大切にし、指導や支援の工夫をすることが大切である。造形活動において「自分らしさ」を『自分の思い』と置き換えることにより、子どもたちの心の内に秘めた“活動や作品への思いや願い”に寄り添った指導の工夫をすることが必要であると考えた。 < B分科会 >

子どもたちが純粋な目でものごとを見たり、内からのエネルギーによってものに触れたりする活動において、自分本来の思いや感覚などを働かせ、自分だけの色や形、表現に出会うという感激の場を数多く経験させたいと願う。また、素材や他者とのコミュニケーションのなかで夢中になれる瞬間があり、これらを積み重ねることによって自分自身を改めて見つめ直し、自分自身のよさや可能性、自分の個性や特徴に気付くとともに、自然や友達、周りの人々のすばらしさにも同時に思いがはせられるような、心豊かな人間に育ててほしいと願う。

2 研究の構造図



II A 分科会報告

サブテーマ

子どもの多様な感覚を呼び起こす題材の工夫

- ・目から感じる手がかりをもとにして
- ・手から感じる手がかりをもとにして

1. A分科会の概要

図画工作の、教科としての有り様が様々な面で広がってきている。授業形態や教材の開発などをはじめ、表現形態の多様化もその一つである。これは、子どもの自由な発想を保障し、制作への不安を除くなどに一役買っている反面、発想止まりで表現が深まらず、混沌としたまま終わってしまうということにもなる。このような視点で授業を見直した時、子どもに混乱はないだろうか、作り上げたものに愛着を示さない子はいないだろうかなどと気になる。図画工作として考え直すべき点はないか、どんな方向を目指し進んでいったらよいかなどの点について、改めて教科の特性を見直すこととした。

表現が深まらない理由の一つに、ものをとらえる時に子どもたちが働かせる感覚に偏りがあるのではないだろうかということが共通の問題として出された。そこで、子どもが本来もっているはずの能力を引き出して、子どもなりの美意識・造形能力を養うことが重要であると考え、そのための多様な感覚を呼び起こす題材を探ってみることにした。様々な感覚を働かせる直接体験が減ってきている子どもたちにとって、日頃働かせている部分と違う感覚を働かせるための教師の投げかけは、子どもの造形意欲につながっていくと考える。また、感覚を総合的に働かせ、そこにあるものを認識し、実体をつかむことは、子どもたちにとって、訴える力をもつ作品を生み出す土台になるものであると考えた。そこで、A分科会では人間の感覚の内の、「視覚と触覚」にしぼって題材を工夫し、主題に迫っていくことにした。

<目から感じる手がかりをもとにして> ー見ようとする目ー

ものを認識する時、多くの場合まず目でとらえる。だが、子どもたちが見る力を十分発揮して造形活動に取り組んでいるかという点、そうでないことも多い。思いこみや自分の都合で選別して見るなど、見ているつもりで表現している。見方の浅さは、思いの浅さでもある。どのような表現であれ、ものの見方の浅さは大変気になる場所である。そこで、見ることを強いるのではなく、見たくなるー不思議だ、きれいだーと素直に感じる体験を重ねていくことの大切さに目を向けた。

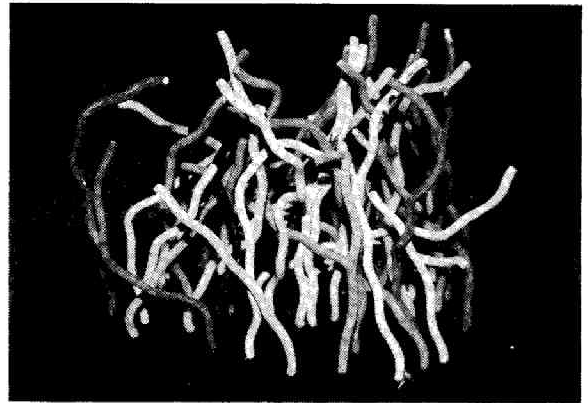
<手から感じる手がかりをもとにして> ー確かめようとする手ー

視覚が間接的にものをとらえるのに対して、触覚（筋肉の感覚や抵抗感を含め）は、身体で触れることで、肌触り・温度・重さなど様々な情報を、直接受け取る。見ただけで質感などが分かるのは、この身体での経験がすでにあるからである。手で直接触れたり、造形的に操作することで、何かを感じ、考え、確かめようとすることは、人間らしい調和のとれた感覚を育てると考えられる。生活の中で、身体全体を使い学ぶ機会が少なくなった今の子どもたちにとって、手で確かめようとすることは重要である。このような体験を通して、造形的な表現への意欲が生まれ、美しさやよさを求める生き方を身に付けていくことを期待した。

2. 実践事例

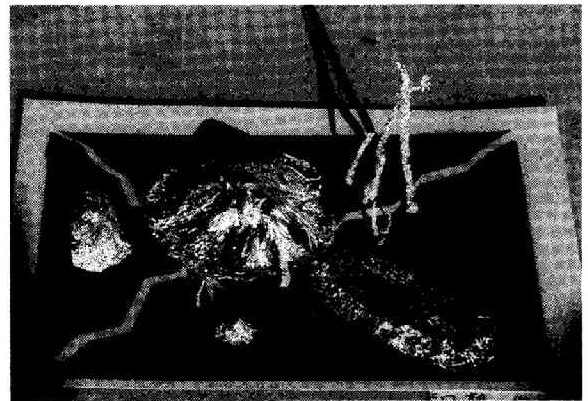
4 年 ニョロボ〜の空間

- ・導入時に、素材にイメージの広がりをもつことができるよう、梱包用材料（発泡ウレタン系素材）を提示し、素材のもつ感じから、ニョロボー（ニョロとして、柔らかく、動きのあるもの）と称した。
- ・感触を楽しみながら、ニョロボーが組み合い、上下に重なってできる空間の面白さを味わった。着色は組み合わせの前に行い、塗り方も自由にしたので、色々な手法が見られた。
- ・素材（ニョロボー）の性質（軽量、加工しやすい等）から、巻き付ける、圧縮する、切る、無作為に置く等の様々な活動が見られた。
- ・素材の軽さから色々な組み合わせ方が可能になった。曲線の点接着は、他の素材ではなかなか難しいが、ニョロボーでは、容易であった。
- ・無作為にニョロボーを並べる等の作為により、素材の面白さを感じ、持ち味を理解し、楽しめたと思う。加工しやすいことは、造形行為の幅を広げることにつながる。



5 年

- ・この題材は、身近材をアルミホイルで覆い型をとることによって、物の感触や量感等を通して見えてくる立体的な形の面白さ・美しさを発見するものである。（ホイラーと命名）
- ・素材として選んだアルミホイルは扱いが容易で、型取りには最適であるが、無作為に選んだ身近材は型取りに不適當なものが多く、持ち寄らせる際にはある程度条件を付けた。（型取りをするという目的は告げなかった。）
- ・導入時には型取りを十分に楽しませた。形を追求する題材なので着彩は一切しないことにした。活動を作品として大切にさせる為に最後は台紙に貼るようにさせた。
- ・構成時にはアルミホイルの可塑性を生かした様々な表現（丸める・よじる・破る等）も加え、自由に活動させた。
- ・子どもたちは物の立体としての意外な面白さや美しさを発見し、造形表現の自由さ・幅広さへも目を向けることができたようである。



3. 研究授業（A分科会）

(1) 題材名 「光と水であそぼう」

（第5学年）

1. 題材設定とねらいについて

本題材は水の中にいろいろな物を入れ、OHPで投影することによって生まれる“新しい美しさ”を発見するというものである。

紙に絵の具で表現したり、立体に表現したりすることとは異なり、光と水によるあそびという形ではあるが、新しい表現方法を体験することは、子どもたちの造形感覚を刺激するものであると考えた。OHPを前に、子どもたちが自由な気持ちで、それぞれの思いを込めて工夫しながら表現することを期待した。

また、グループで活動し、他のグループの活動を見ることにより、友達のよさや工夫を認められるようになることも期待した。

2. 材料・用具・場の設定

<教師> OHP, 水槽, 水, はさみ, ペンチ, サインペン, インク, セロファン,
アルミ線, 透明容器, ビー玉などの身辺材

<子ども> 筆記用具, ビニル袋, タオル

場の設定・・・暗幕があり, 水が使える教室

3. 評価

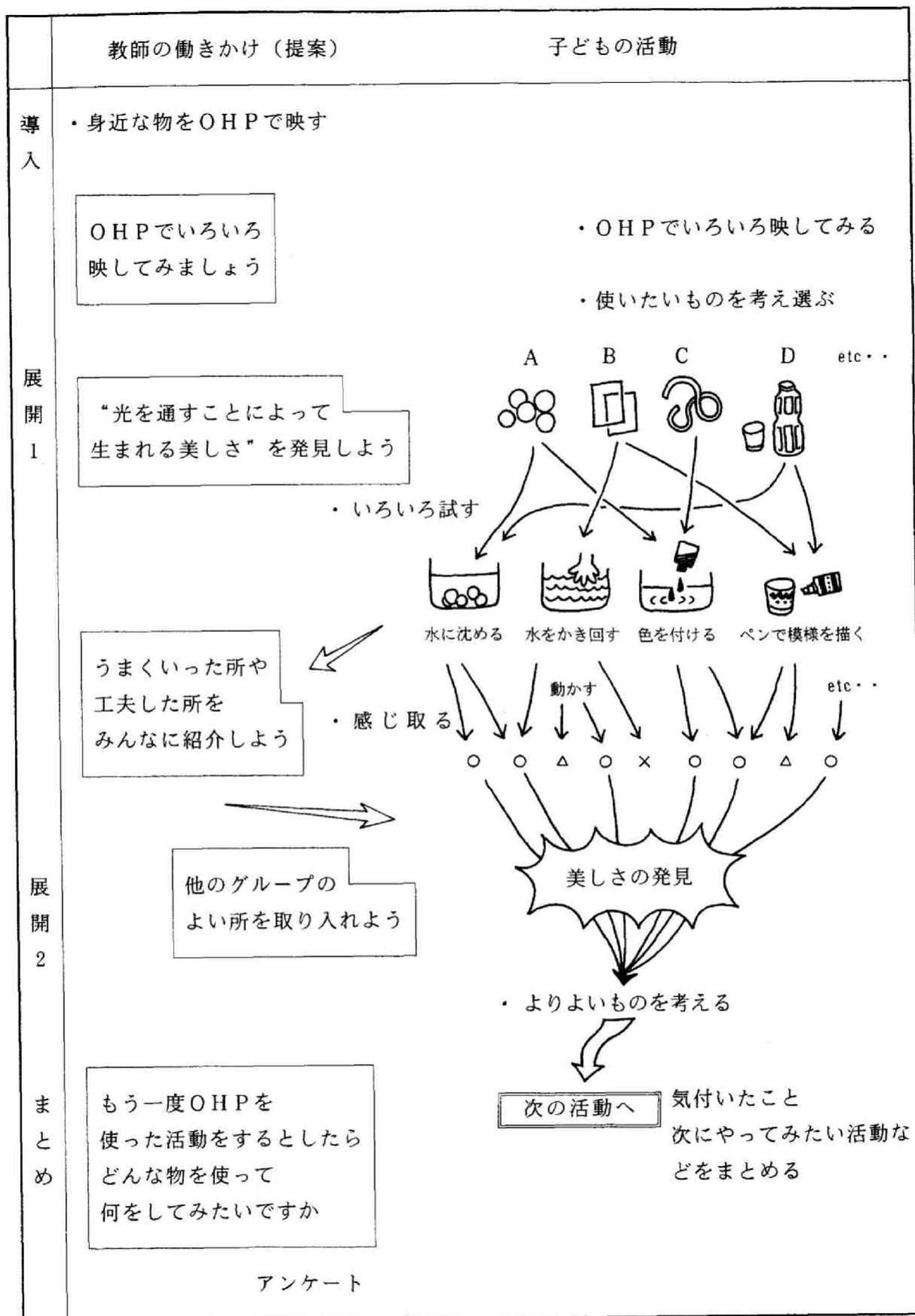
- ・それぞれの思いを込めて, 工夫を試みながら表現できたか。
- ・OHPで投影することによって生まれる美しさを発見できたか。
- ・友達や他のグループのよさや工夫を認めることができたか。

4. 考察

OHPの操作ははじめての子どもが多いこともあり, 興味をもって活動することができた。教室を暗くして光を使い, 普段とは違った環境に身をゆだねるということは, 子どもの造形感覚を刺激するのに役立ったと思われる。水をかき混ぜたり, ビー玉を転がしたりして光の輝きや美しさを感じ, スクリーンに予想を越えるような映り方をする物があることに気付き, 次々といろいろな方法で試してみたいという気持ちが生まれてきたようだった。グループで体験を共有することにより, 友達とのコミュニケーションも図ることができた。

今回は光との出会いを大切にしたいと考えたため, 子どもたちへは予告なしで授業を行った。そのために子どもが使ってみたい物を十分に用意できるかどうか不安な面もあったが, 授業の終わりにとったアンケートでは, またやってみたいという意見がほとんどであったので, 子どもたちの思い思いの発想で準備した物を使うと, また違った展開が見られるのではないかと予想される。

5. 学習の流れ（1時間）



1. 題材設定とねらいについて

子どもたちの様子を見ていると、実際に身体や手を使って遊ぶことが少なく、土遊びをしたり、木や葉を使って遊ぶことも少ないようだ。したがって、ざらざらしているとか、やわらかいなど、見て知っているつもりでも身体で確かめる経験も少ないのではないか。そのことが図画工作の授業でも希薄な表現として表れてくるのではないかと予想される。そこで子どもたちの感覚を刺激するような題材の工夫をし、身体や手を働かせ、そこから感じたものを造形活動に生かしていくことをねらって題材の設定を行った。そうすることで、子どもたちが本来持っている造形能力や造形への意欲を引き出すことにつながると考えたからである。

本題材では、子どもたちにねんどの塊を与え、練ったりたたいたりする活動の時間を十分に確保することから始め、ねんどそのものの質感や量感を感じることに子どもの目を向けさせた。そして、その活動から手で感じたものをもとに、作ってみたいものを子どもが自分で決め、製作していくことにより質感や量感を生かした活動ができると思った。

2. 材料・用具

- <教師> ねんど、鉢底ネット、ねんどべら
- <子ども> 絵の具、接着剤、はさみ、自分で集めた材料

3. 評価

- ・ねんどを練る活動を通してその感触を十分味わい、そこから自分が表したいものに気が付くことができたか。
- ・自分なりの表し方の工夫ができたか。

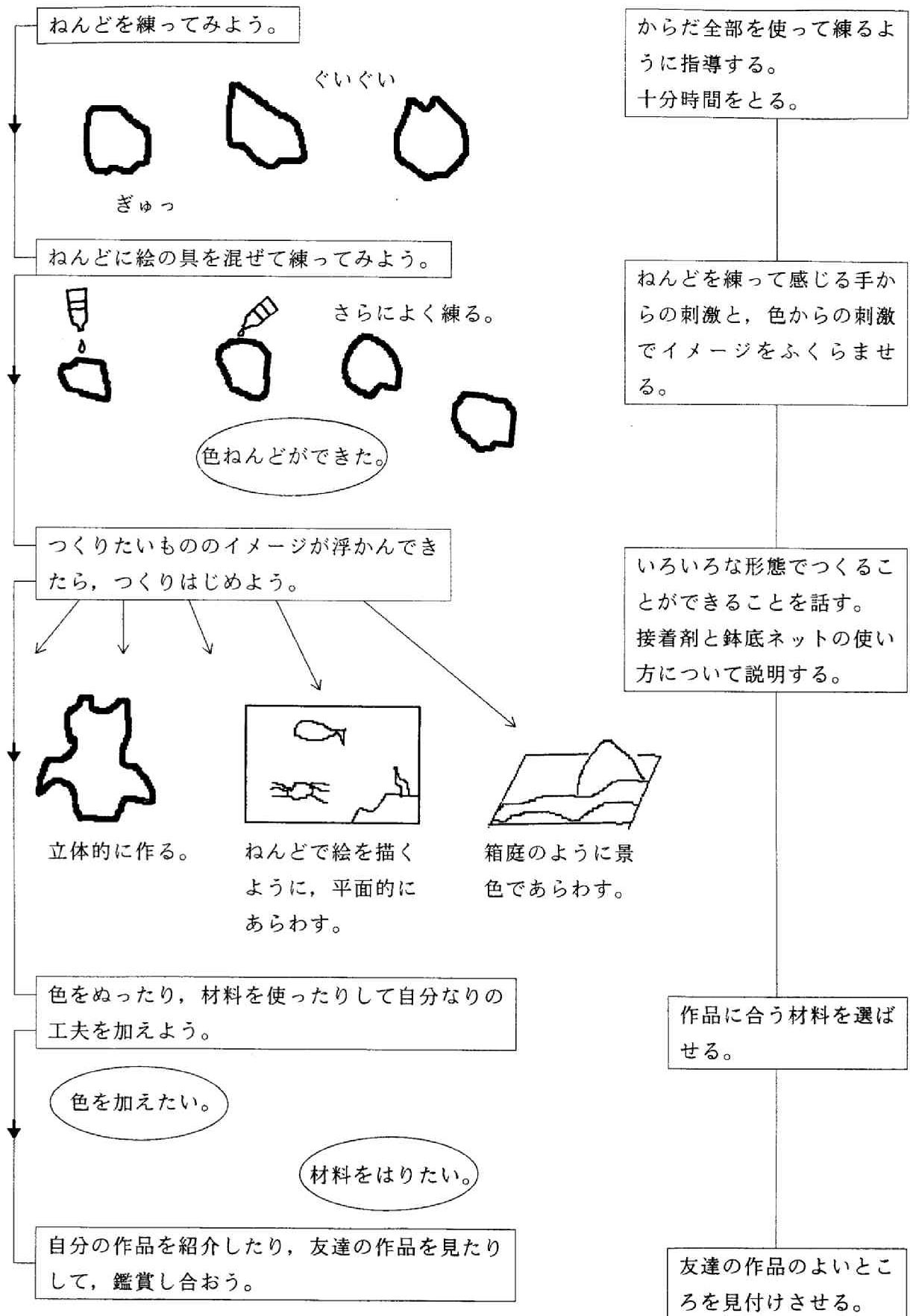
4. 考察

子どもたちは大量のねんどの塊をまえに興奮し、積極的に練ったり、たたいたり、穴をあけてみたり、ひもをつくってみたりといろいろな活動を試した。また、ねんどをなでてみたり、ぎゅっとにぎってみたりしてその気持ちよさも十分味わっている子どもも多かった。子どもにとってはかなり多めの量のねんどだったので、身体全体を使うことができたようであった。

その後の作品作りでは、身体全体でねんどの感触を味わうことができたので、身近な食べ物を作ったり、山と川の風景を作ったり、大きなきのこを作ったりと多様な作品ができた。また、ねんどの塊そのものを使って作る子どももいれば、小さくまとめる子どももいて、個の発想の違いが見られた。さらに、作品台として用意した鉢底ネットが、教師の予想を超えていろいろな使われ方をされており、材料について改めて考えさせられた。

つくりたいものを自分で決めることができたので、全体として最後まで意欲が衰えず、満足するまで熱心に取り組む姿が見られた。

5. 学習の流れ



1. 題材の設定とねらいについて

崩れかかった壁や、はげかかったペンキがなぜか美しく見えるときがある。あの肌触りが人間の感覚に何かを働きかけているのだろうか。図画工作における版画においても、これに似た味わいが見られる。プレス機を使って細部まで実物（版）通りに写しとる版画は、ダイレクトに刷り取る点で、肌ざわりが生々しかったり、独特な物質感を出したりする。この視覚上の肌触りを、ものづくりのきっかけにできないだろうか。ゴツゴツしたものよりツルツルしたもの、ゴテゴテしたものよりサッパリしたものと、現代人の好みは感覚的に抵抗感の少ないものへと傾きかけているような気がする。今回、敢えて強い肌触り感を出す版画を子どもに投げかけることにより、子どもが本来もっている未知の感覚を呼び起こし、創造の意欲を高めることをねらいとした。

2. 教材・用具

<教師> 版画用紙、油性インク、ローラー、たんぼ、新聞紙、エッチングプレス機、ベニヤ板、塩化ビニル板、ニードル、木工用接着剤、紙粘土、ニス、布、黒画用紙か白画用紙（コラージュの台紙）、カッターマット

<子ども> はさみ、カッター、のり

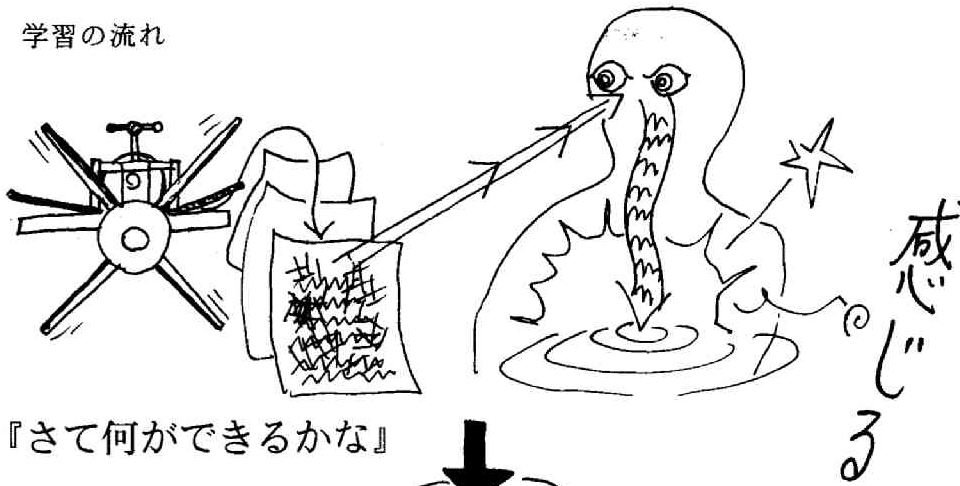
3. 評価

- ・プレス機の刷り取った版画から、独特な肌触りや物質感を視覚的に味わったか。
- ・刷り上げた版画の視覚的な肌触り感からイメージを広げ、コラージュの技法で画面構成ができたか。

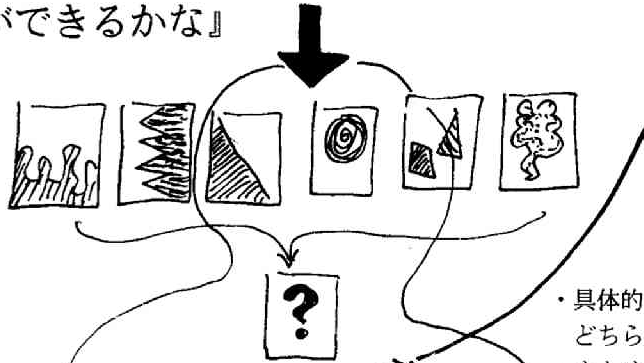
4. 考察

版作りの段階では、ベニヤ板に紙粘土を薄く延ばし、型押しや、植物や砂を埋め込むなど多様な工夫が見られた。次の刷りの段階では、インクのローラーを弱めに転がして、凸部のみにインクを付けて凸版刷り、たんぼでインクを押し込み、凸部のインクを拭き取って凹版刷りと、一版で二種の刷りができた。また、木工用接着剤やニスで描いた版も、おもしろい刷り上がりになった。刷り上がりの効果の違いに、多くの子どもが興味をもって見入っていた。また、同時に肌触り感も味わったようである。さらに、切り貼りの段階では、版画の視覚上の肌触りよりも、版画の中から見つけた形を優先させて、「丸いから太陽」「三角だから家の屋根」といったような、積み木遊びに似た構成をする子も見られた。今回、コラージュでまとめるようにしたのは、凹版もプレス機の刷りも初めてなので、刷り上がりの予想を立てての版作りは困難であろうと予想されたからである。しかし、版画のまま終わらせても印象深いものが刷れていたもので、さらに展開させるのであれば、版画による表現のよさが一層生きるような指導の工夫が必要であると考えられる。

5. 学習の流れ

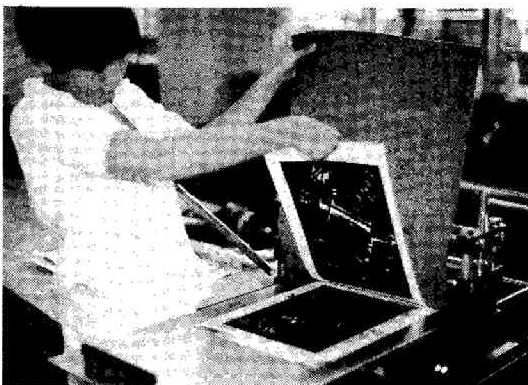
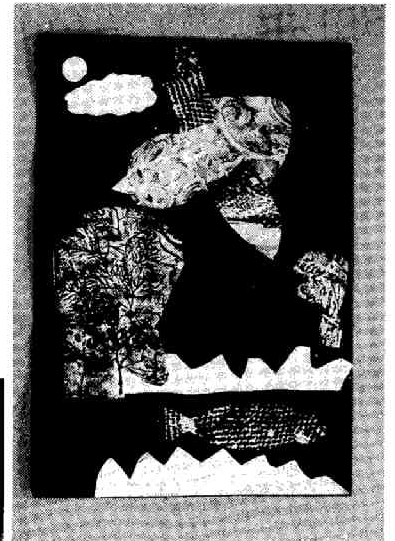
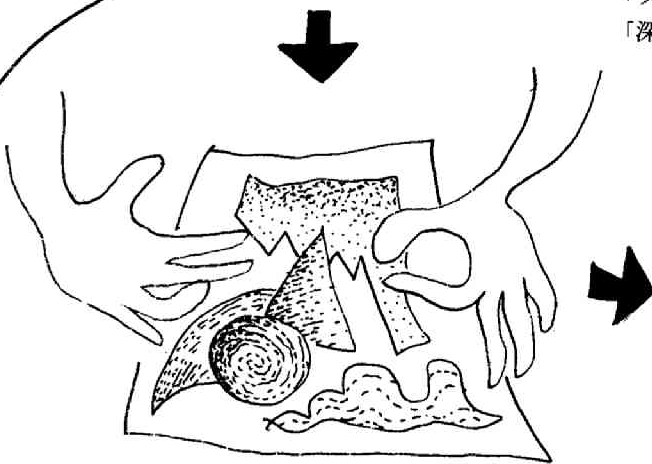


『さて何が出来るかな』


















- ・具体的・抽象的表現
どちらでも
- ・まとめる方向が決まらない子には
「不思議な世界」
「心の中をのぞいたら」
「ブラックホールのむこう」
「深海魚」などの例

組立てる



4. 主題に迫るための視点一覧表

<子どもの多様な感覚を呼び起こす題材の工夫>

	材料・素材	光と水であそぼう (5年)	
	目や手から感じる 手がかり		OHP 水 水槽 身辺材(ビー玉等)
	教師の思い		<ul style="list-style-type: none"> ・暗い空間の中の印象 ・光を通すことよって生まれる美しさ。 ・水の動き、かき回す手に伝わる感触。
	子どもの活動		<ul style="list-style-type: none"> ・水に色をつけたり、ビー玉を中に入れて転がしたりしながら美しいものを選んでいく。他のグループの活動を見て良い所を取り入れる。
	感じたものが表現 に生かされたか		<ul style="list-style-type: none"> ・光と水によって生まれる美しさを感じ取りさらに工夫を重ねいろいろな美しさをつくり出して欲しい。 ・他の活動のよさを気付かせる。
		<ul style="list-style-type: none"> ・光や水を使い、スクリーンに予想を越える映り方をするものがあることに気付いたことで、次々と試したい気持ちが生まれた。 	
ねんどでつくろう (3年)			
	発泡スチール ねんど 鉢底ネット 絵の具 接着剤		
	<ul style="list-style-type: none"> ・ねんどを練ることで感じるねんどのやわらかさ、気持ちよさ、思ったように形が変えられるおもしろさ。 		
		<ul style="list-style-type: none"> ・ねんどの塊を練ったり、ねんどに絵の具をまぜて練ったりする。 ・ねんどを練った感触から自分が作りたいものに気付き、造形表現する。 	
	<ul style="list-style-type: none"> ・ねんどを押ししたり、練ったりつかんだり、たたいたりして手をよく使い手の感覚を生かした活動をさせたい。 		
		<ul style="list-style-type: none"> ・ねんどをよく練る活動を工夫することで感触を十分に感じる事ができ、自分が作りたいものをじっくり考え、確かめて最後まで意欲的だった。 	

版画コラージュ (5年)



版画用紙 ベニヤ板
紙粘土 接着剤
台紙 (白・黒)



・様々な材料を埋めこんだり、型押しした版の手触り。
・刷り上がったものの視覚的な肌触り。



ベニヤ板、紙粘土などで版を作りプレス機で刷る。刷り上がったものを切り貼りで構成する。



・目で見ただけの肌触り感から造形のヒントを見付け、色や形と同様に視覚的な肌触り感が造形要素の一つになることを知る。



凸版・凹版の刷りの効果の違いを味わった。版画独自の表わされ方を、構成の中に生かしていた。

でてこい！ホイラー (5年)



アルミホイル
身边材



・外観的要素を取り除いた、ものの感触や量感などを通して得られる、立体の形の面白さ、美しさ。



・視点を変えたものの見方を体験させたい。・ものの見方に広がりをもたせたい。



・様々な物の型どりを試み、きれいに再現された形の中味が空という面白さを味わう。



・身边材の、立体的な形を新鮮にとらえることができた。
・自由な構成を通し、表現の可能性を探ることができた。

ニ
ヨ
ロ
ボ
ー

の空間 (4年)



梱包用資材 接着剤 台紙
非溶剤系顔料インク



・梱包材のニョロとした形の面白さに気付く。
・フワッとした梱包材(発泡ウレタン系)の感触を楽しむ。



・梱包材に着色する。・梱包材を台紙に貼る。(ねじる、切る等、手を入れてよい)
・段々と積み上げて大きな広がりにする。



・素材の形の面白さと感触の楽しさを基に造形活動の広がりを求める。
・素材の特性を生かした活動を求める。



・加工が簡単、接着がしやすいという利点から自分がイメージするものに近付きやすかった。・素材の感触感が作品づくりの意欲につながった。

Ⅲ B 分科会報告

□サブテーマ 子どもの多様な思いを生かす指導法の工夫・・・支援の工夫□

1. B分科会の概要

子どもたちは、日々、身の周りの環境から様々なものを感覚で受け止めると同時に、それらを個々の表現を通じて発信し続けてきた。図画工作における造形表現は、この多様な子どもたちの感じ方や、思いなど個性の違いが出発点になってきた。したがって、同じ題材や対象を基にして造形活動が始まったとしても、そこにおける子どもたち一人一人の興味・関心、思考過程、表現方法や活動の姿などにも、もちろん違いが見られるはずである。その多様さに応じることが、まさに子どもの「思い」を生かしていくことになると思う。子どもたち一人一人の内に秘めたよさや可能性を引き出し、多様な思いを支え、個が生かされる造形活動を目指し、「子どもの多様な思いを生かす指導法の工夫」をサブテーマに、一人一人の子どもの立場に立った支援の在り方について三つの視点を置き、研究を進めてきた。

◆視点 ① 材料・素材の選択

ものが巷にあふれ過剰時代の波は、子どもたちの世界にも波及している。子どもたちの自分らしさを培っていくためにも、直接体験による素材感を十分味わわせる上で、個々の表現の思いに合わせた材料や素材の選択能力を十分身に付けさせたい。子どもの活動を「この材料をこのように使いたい」と課題意識をもった活動に変容させていくためにも、授業の流れの中で多様な素材や材料にめぐり合わせる工夫や、自分の活動を振り返り、試行錯誤しながら素材や材料を選択する力を付けていったり、最終的には、自ら使う材料は準備したりできるという、子どもたちの自発的な活動のための能力を身に付けさせたい。

◆視点 ② 個に応じる表現方法の選択

子どもたちに直接活動を指示し限定するような指導の在り方から、子ども自身が選び取ることでできるような活動へと、指導の在り方を変えていかなければならない。同じ課題に取り組んでも材料や素材とのかかわりから出発していく子、何となくというイメージから友達に刺激され、思いが深まっていく子、用具や技術的なことに興味を抱き、発想を広げていく子など、様々な活動が予想される。教師はそのような子どもの活動に見通しをもち、個に応じた支援をしていくことが一人一人の思いを大切にしていくことになる。課題そのものに対しても、子どもたちが多方面から選択できるような学習活動の展開に幅をもたせることも重要である。

◆視点 ③ 学習環境の設定

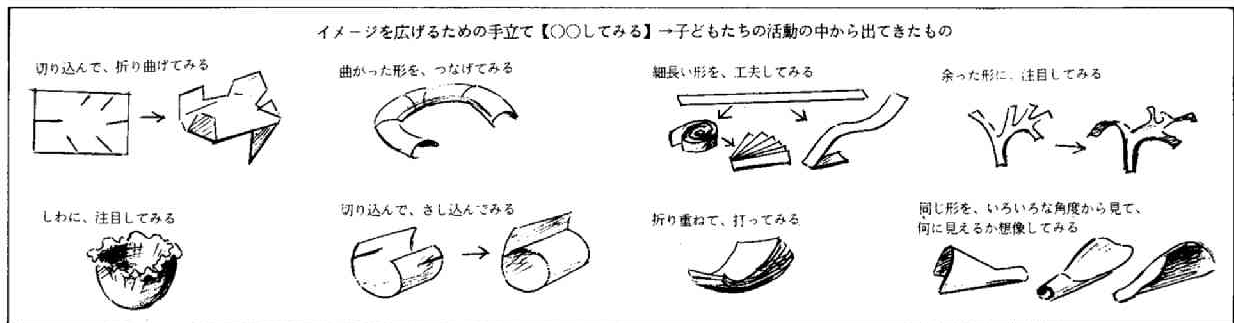
多様な思いを生かすことのできる学習環境を、物的環境・空間的環境・人的環境の三つの柱でとらえてきた。子どもの造形活動のヒントになるような、効果的な作品提示や机の配置、材料や道具の使い勝手などを考慮した教室環境の工夫や、時には教室という枠を越え、感性を刺激したり心を開放したりするような創造スペースも考えた。教師は子どもの活動への思いを把握し、温かい信頼関係のもとに支援的な指導と評価に努めるようにしたい。材料や素材を整え、十分な素材感を日々の造形活動において味わわせることや、子どもたちの活動や作品そのものも、互いによい刺激を受ける環境ととらえてきた。この三つの学習環境がかみ合った時、子どもたちの表現欲求も満たされ一人一人が生かされることになると思う。

2. 実践事例

5年 「心にひびく銀色の立体」

- (1) 一枚のアルミ板を、自由に、切断・変形・接合・組み合わせをして、自分の気持ちに合った立体を作ろうと提案し、子どもたちはどう切ったらいいか考えながら切っていた。
- (2) 切り込みを入れたり、打ったり、折ったり、丸みを付けたり、曲げたり、穴をあけたり、つないだりして、様々な働きかけをしながら、同時にイメージをふくらませていった。
- (3) 別々に作った形のそれぞれを、いろいろな角度から見て、何かに見立てた。さらに、それらの組み合わせを考え、自分のテーマをはっきりさせていった。

〔考察〕 素材と十分にかかわり、各自の思いのこもった表現ができていた。打つ・切る・曲げるといった活動そのものが楽しいからなのか、それとも、働きかけに呼応するように変化していく素材の魅力に引かれるからなのか、子どもたちは熱心に取り組んでいた。しかし、ただ活動そのものが自己目的化する場合と、さらに創造的な表現活動につながっていく場合との見極めが難しい。その意味で①立体的なイメージを広げるための手だてを与えること、②組み合わせ等により自分のテーマをはっきりつかませることの二つが重要である。また、一人一人の活動の方向が多様であるから、個々に応じた柔軟な指導やさらには相互に発表・鑑賞をする機会を設けることも必要である。



6年 「12才の自分を見つめて」

自分の顔をじっくり見るということは、とても大変で苦しいことである。ただ楽しい時間だけを過ごせばいい、というような簡単なものではないということを理解してほしいと思い、毎年6年生最初の題材にしている。

水彩画用紙(4切)紙面いっぱいに、3Bか4Bの鉛筆で各部の位置を大まかに描く。次に鏡を見ながら、パステルを使い、色を混ぜ合わせていく。その際、指・ティッシュペーパー・布などを使い、質感の違いにも気付くように助言する。最後に周りの汚れを消しゴムできれいにして、フィキサチーフをかけて完成させる。色の違いや明るさの違いを判断させて色を置いていくことは、むずかしい面もあるが、いろいろな色を混ぜ合わせている中で、偶然よい色に出会ったりする事を通して、その子なりの表情や表現方法が出てくるので、子どもにとっては楽しい題材である。



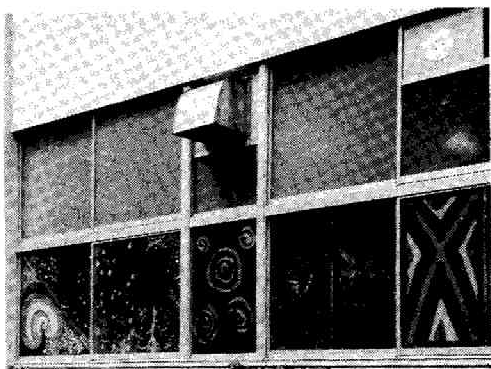
3. 研究授業（B分科会）

(1) 題材名 「音・風・におい…」を窓ガラスに描こう

（第6学年）

1. 題材設定の理由

両側に大きな窓ガラスが並んでいる図工室なので、窓をキャンバスとして、大きな画面に自分の思いをのびのびと表現させてみたい。そして、美術館のように変わった図工室の雰囲気



気を味わいながら友達作品を鑑賞する中で、自己を客観的に認識する力や他者理解のための感性を育てたい。描く内容は、人間がもっている感覚をさらに積極的に働かせて、自然環境から目に見えないものを感じ取り、そこからイメージしたものを表現することにした。直接大きな窓ガラスに描くことの抵抗を考え、小さい画用紙に手軽にいろいろな習作を重ね、自分の思いを深めてから窓ガラス製作へとつなげていく展開をとった。

2. ねらい

- ・いろいろな表し方を試み、その効果を感じ取りながらイメージを広げたり深めたりして自分の思いを追求する。
- ・大きな画面にのびのびと表現する楽しさを味わう。
- ・互いに作品を鑑賞する中で、友達の表現の美しさやおもしろさやよさ等に気付く。

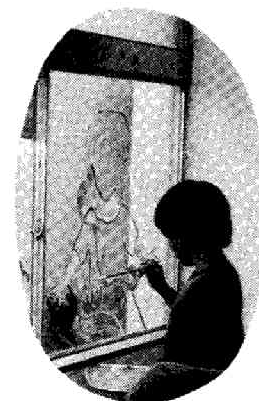
3. 材料・用具

〈画用紙に習作の時〉絵の具道具、網とブラシ、マーブリング液

〈窓ガラス製作の時〉ポスターカラー、お盆と刷毛、カラーペン

4. 評価

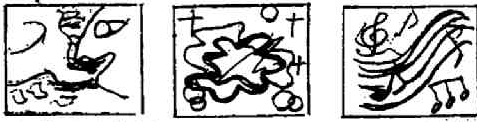

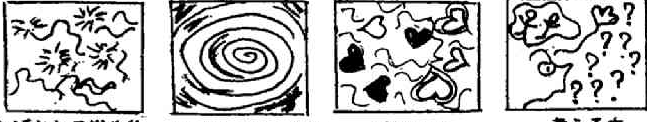
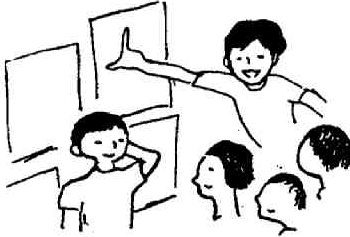
- ・いろいろな表し方による効果に気付き、それを生かしながら自分の思いを表そうと意欲的に取り組んでいるか。
- ・画面いっぱい自分の思いを表現できたか。
- ・友達の作品をよく鑑賞しながら、そのよさを感じ取っているか。



5. 考察

はじめに小さな画用紙に、にじみ・ぼかし・マーブリング…等を遊ぶ気持ちで自由に取り組みさせたことで、子どもたちは楽しみながら活動することができた。なかには、いろいろな表し方を試すだけで、そこからどう自分の表現として発展させていくか発想がわからずに悩んでいる子どももいたが、外国の画家の絵（シャガール、ゴッホ、クレー…等）を見せたり、習作のたびに友達の作品を紹介して鑑賞させたりするうちに、自分なりのイメージをもって表現するようになった。その心の過程は、子どもの活動の様子やつぶやきの他、製作カードや鑑賞カードを通してもつかむことができた。「音・風・におい…」から出発したが、いろいろな習作を重ねるうちに他の見えないものも描いてみたいという広がりが見られ、それも認めることにした。そうした作品からは、子どもの興味の向け方にも個性を感じることができた。そして窓ガラス製作の時は、子どもたちは今までのうちで自分の表したいものに一番合ったものを選んで描くことができ、満足したようであった。

6. 学習の流れ（8時間） ●材料・素材の選択 ◆表現方法の選択 ■学習環境の設定

	子どもの活動（児童の作品）	提 案	教師の支援
第一次 （2時間）	<p>・ 昨日の音楽鑑賞教室で聞いた音のイメージを形や色で表す。</p>  <p>トロンボーンを吹く人 トロンボーン ハープの響</p>	<p>音のイメージを表してみよう</p>	<p>■参考作品の提示 （シャガール、クレー等 外国の画家の作品）</p> <p>●◆ちいさな紙にいろいろな表し方を試して遊ばせ、そこから発想して自分の表現につなげさせる。（にじみ、ぼかし、紙むみ、手形・指先スタンプ、マブリング、スパッタリング…）</p>
第二次 （2時間）	<p>・ 風やにおいを体感し、そのイメージを形や色で表す。</p>  <p>竜 巻 風と鳥 田んぼを吹く風</p>	<p>風・においのイメージを表してみよう</p>	<p>■体感の場を設定する。（校庭に出る、メロンを切る）</p> <p>■友達の商品を紹介し、発想がわからない児童のヒントにさせる。</p>
第三次 （3時間）	<p>・ 「音、風、におい」以外のものも思い付いたら表現してみる。</p>  <p>とばされる微生物 飲み込まれる恐怖 愛の予感 考える力</p>	<p>他に目に見えないものってなんだろう</p>	<p>■製作カードにより個々の思いをつかみ、認め励ます。</p>
第四次 （1時間）	<p>・ 窓ガラスの場所を決める。</p> <p>・ 自分の思いに一番合った作品を選び、表現する。</p> <p>・ 出来上がったら題名を付ける。</p> <p>・ 一人ずつ自分の作品を紹介し、友達の作品を鑑賞する。</p> <p>・ 鑑賞カードに記入する。</p> <p>・ 感想を述べ合う。</p>	<p>いよいよ窓ガラスに描こう</p> <p>●◆筆やカラーペンだけでなく手形や指跡を使ったり、はけでぼかしたり、表現の工夫を考えさせる。</p> <p>◆■いろいろな表現に気付かせる。</p> <p>■題名から一人一人の思いを感じ取らせる。</p> 	<p>■窓ガラスが全員に割り当たるように分割し、話し合いで場所を決めさせる。</p> <p>（児童相互の認め合い 学び合い）</p>

(2) 題材名 「しばって、しばって、チョウ（長）布キレ〜！」

(第4学年)

1. 題材設定の理由

子どもたちが素材と出会い、空間の中でその素材とたわむれながら活動する中で、様々なことを発見できるような体感をさせたい。そこで、広い空間を活動の場として、大量のカーテンやシーツなどの大きな布を素材に、全身体感を駆使しながら、変化して行く広い空間と、布の質感や量感、素材を組み合わせながら変容させるということを楽しむものである。布をしばりながら、ひもでしばって、長くつなげていく中で、子どもたちは全身を使って、友達とも協力し合いながら共通の空間と素材を共感することができる、そして、活動の中で見付けた形などから自由な表現をさせたい。

2. ねらい

- ・大量の布にたわむれ、質感、感触を体感する。
- ・布をしばりながらしばって、長くつなげて楽しく活動する。
- ・変容した形や空間を感じ取る。



3. 材料、用具

カーテン・シーツなどの大きな布、ひも、はさみ、アルミ線、カラーペン、新聞紙。

4. 評価

- ・広い空間を利用して、十分に大量の布にたわむれることができたか。
- ・布をしばりながらしばって、友達と協力して長くつなげることができたか。
- ・できた作品を空間や環境の中で、楽しく鑑賞することができたか。

5. 考察

第一次では、体育館という広い空間の中で、大量の布で楽しく遊ぶことができた。カーテンやシーツという布は、子どもたちの全身を包んでしまうくらいの大きさで、必然的に全身体感を駆使して格闘できる素材であった。布の端を柵や窓枠にしばりつけたり、友達と持ち合ったりしながらしばるときには、おおなわとびのように大きく回しながら全身でかかわることができた。そして、友達と協力して長くつなげていった布を空中へと張り巡らせていき、十分に全身体感で変容した空間を鑑賞し合った。



第二次では、個人作品としての活動となり、布の大きさや色合いなどを選択して、新聞紙や他の布を詰め込んで形にすることを楽しんだ。いろいろな材料がある図工室を活動の場として、見付けた形から人形にしたり、しばってしばるひも自体も飾りの一部としたり、手足や飾りにアルミ線などを利用したり、カラーペンで顔や模様などを描きこみながら、それぞれの思いによる表現方法で製作した。そして、出来上がった作品を体育館のろく木に展示したり、校庭の木立や鉄棒、遊具などにつるして、遊びながら楽しく鑑賞し合った。

きれいな布ではなかったが、素材として活動し製作しているうちに子どもたちは愛着をもち、大事そうに抱えて持ち運んでいた。まるで、思いや願いがかなったかのようなであった。



6. 学習の流れ（4時間）

●材料・素材の選択 ◆表現方法の選択 ■学習環境の設定

	子どもの活動	提 案	教師の働きかけ
第一 次 （ 2 時 間 ）	<p>・大量の布を広げ、まったり走り回ったりしてたわむれる。</p> <p>・布をしぼって、ひもでしぼる。</p> <p>・長くつなげていく。</p> <p>・長くつなげた布を持ち上げたり、遊具にひっかけたりして遊びながら鑑賞する。</p> <p>・後片付けをする。</p>	<p>布で遊ぼう</p> <p>布をしぼって、しばって、つなげよう</p> <p>持ち上げたり、ゆらしてみよう</p>	<p>●◆■広い空間と、素材の量感、質感を十分に感じ取らせる。</p> <p>■一人で作業できない時は、友達と協力させる。</p> <p>◆しっかりと解けないようにしばらせる。</p> <p>◆■グループで協力して、いろいろな方向に活動が広がるような言葉かけをする。</p> <p>◆■ゆらして変化する形や量感、空間を感じ取らせる。</p> <p>◆■つながっている布をたどらせる。</p> <p>■みんなで協力しながら片付けさせる。</p>
	<p>・布をしぼって、しばって、いろいろな形につなげる。</p> <p>・中にいろいろな物を詰め込んでふくらませる。</p> <p>・見つけた形からイメージしたものをつくる。</p> <p>・動かしたり、つりさげて遊ぶ。</p>	<p>布をつなげていろいろな形にしよう</p> <p>他の材料も利用しよう</p> <p>思い付いたものにしよう</p> <p>出来た作品を動かしたり、つりさげたりして遊ぼう</p>	<p>■質感を感じ取らせながら、変形させてみる。</p> <p>●余りの布、新聞紙、アルミ線、カラーペンなどを用意する。</p> <p>■床に寝かせたり、つるしたりして見させる。</p> <p>◆■形や表情の変化を楽しませる。</p> <p>◆■校庭、体育館の遊具なども利用させる。</p>

(3) 題材名 「魔法のタネから・・・が」

(第5学年)

1. 題材設定の理由

子どもたちが心の中にそっと抱いてる「ゆめ」や「ねがい」を『魔法のタネ』に託し、今の自分を改めて見つめ直す機会をもたせたい。『魔法』ということ自体が子どもたちの興味や関心を引き付ける題材であり、空想の世界に遊び、十分に心を開放させながら自分の造形活動を通して将来への希望を描いたり、友達と自分との表現の違いに気づき互いの個性を認め合わせたりしたい。また、多様な素材や材料を自分の思いに添って選択したり、今までの造形活動の経験から、自分なりの表現方法を工夫したりするなど、子どもたち自身が選び取っていきけるような課題意識をもった活動へと深めさせていきたい。

2. ねらいについて

- ・自分のイメージに合った素材や材料の選択をする。
- ・多様な表現方法の中から選択したり、自分なりの表現方法を工夫したりする。
- ・友達の活動や作品を見て、よさや面白さを感じ、自分の作品にも生かしていこうとする。

3. 材料・用具

〔教師〕・・・画用紙、色画用紙、水性・耐水性カラーペン、色鉛筆、接着剤、紙粘土、
カッター、カッター板、ローラー、インク練り板、ブラシ、網、ストロー、
アルミホイル、モール、ビーズ、ビー玉、おはじき、折り紙、わた、ひも、
色セロファン、毛糸、リボン等（材料銀行にあるもの）

〔子ども〕・・・水彩絵の具、はさみ、のり、自分の作品作りに必要な材料

4. 評価

- ・自分の思いを、様々な材料や表現方法のなかから選んで使い表現することが出来たか。
- ・友達や自分の作品のよさに気づき、お互いに認め合うことが出来たか。



5. 考察

子どもたちは『魔法のタネから・・・が』という題材名に引き付けられ目を輝かせて取り組んだ。子どもの思いと教師の思いをより近付けるためにも、日々の授業の中で子どもたちのつぶやきを大切にしたり、製作カードや鑑賞カード、座席表による評価リストなど、次時の活動が意欲的に進んでいくような手立てを多方面から考えた。子どもたちも自分の活動を毎回見つめ直し、思いを深めていくことが出来た。また、互いの作品を見合う時間を幾度となく設定したが、大変よい刺激となり、よさを改めて発見できた。教室環境の工夫として、子どもたちが自由に選んで使えるような移動式の「材料銀行」を設置した。あふれる材料を選択できるかという心配も次第になくなり、その子なりの使い方や表現方法の工夫が随所に見られた。子ども自らが選び取っていく力が少しずつ付いてきたようだ。

	〔子どもの活動〕	〔提 案〕	〔教師の働きかけ〕
第一次 （2時間）	<ul style="list-style-type: none"> ・「魔法のタネ」から自分の『ゆめ』や『ねがい』をもち、思いを広げる。 	<p>魔法使いにもらった願いのかなう「魔法のタネ」あなただったらどのような物が実になるとよいと思いますか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ◆■自分や友達の思いを大切にし、互いの思いを認め合えるよう助言。 ◆■思いが深まらない子へは、個別指導に当たり、「ヒントカード」や友達の考えを参考にさせたりする。
	<ul style="list-style-type: none"> ・「製作カード」の記入によりさらに自分の思いを深めていく。 <p>願い事をカードに書いたり、自分や友だちの思いを発表し合ひましょう。</p>		
第二次 （5時間）	<ul style="list-style-type: none"> ・発表する事により、自分や友達の思いを互いに知る。 	<p>自分の思いをどのような材料や表現方法で表しますか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ■効果的な作品提示の工夫をする。
	<ul style="list-style-type: none"> ・アイディアスケッチをもとに、自分の活動に必要な材料の見通しを立てる。 <p>自分のイメージに合った材料は・・・?</p> <p>材料銀行を調べ、計画を立てましょう。</p>		<ul style="list-style-type: none"> ■●子どもたちが活動しやすい活動スペースの工夫をする。 <p>用意できる材料は自分で用意しましょう</p>
	<p>これまでの経験から自分の思いに合った表現方法を選んでみましょう。</p>		
第三次 （1時間）	<ul style="list-style-type: none"> ・「画用紙」の選択や自分のイメージに合った表現方法の工夫をする。 	<p>友だちの作品のよいところは？</p> <p>自分や友だちの作品のすてきなところを紹介し合ひましょう</p>	<ul style="list-style-type: none"> ◆■前時までの製作カードや作品を確認しながら、その子なりの表現方法の工夫を認める。 ■認め合う場をもち、よさを評価。
	<ul style="list-style-type: none"> ・互いの作品を鑑賞し認め合う。 		

4. 主題に迫るための視点一覧表

◇子どもの多様な思いを生かす指導法の工夫

材料・素材	表現方法	学習環境		
		物的	空間的	人的

重点的な支援

4 年

しばって、チョウ（長）布

- 多様な活動に対応できるように材料・素材を大量に集める。
- 教室内だけではなく、校庭や体育館を活動の場とする。
- 天井からつり下げたり、校庭の木立や鉄棒などの遊具も活用する。
- 子どもが関心をもつ魅力的な題材を提案。
- 子ども同士が協力する場面の設定。

布をひもでしばってつなぐ
材料を生かして装飾する

古いカーテン、布
新聞紙、ひも、カラーペン

12才の自分を見つめて

6 年

- 水彩画用紙
パステル
定着液
- 世界の著名な画家の自画像を提示。
- 様々な機会に提示して、友だちのよい所を見合う。
- 鏡を見て、紙面いっぱいに目など位置確認して描く。
- 指、布などでこすって質感を工夫

5 年

- 色画用紙、色セロファン
アルミホイル、紙粘土
モール、ピーズ
おはじき、毛糸など
- 自分の表したい画用紙の選択（色・形）
製作過程で表現方法の選択
- 材料・素材を十分に集め、自由に使えるスペースの工夫
子どもたちにも自分で必要と思う材料を用意させる。
- 作品作りのヒントになるような提示の工夫。
よさを認め合える学校全体のスペースの有効利用。
- 子どもの思いを把握するため、製作・鑑賞・評価カードなど、必要に応じて行う。

魔法のタネをまいたら・・・が

音・風・におい・・・・を窓ガラスに描こう

習作時

絵の具、

マーブリング液

網

ブラシ

ガラス製作時

ポスターカラー
カラーペン



- ・イメージをふくらませるための素材の設定。
- ・大胆に描けるような道具の与え方、設定。
- ・体感のための場の設定。



- ・窓ガラス製作のための場の設定。
- ・窓ガラス人数分割。



- ・製作カード、鑑賞会で自他の作品を認め合う。
- ・教師の共感的な支援。



- ・習作を重ね、イメージを広げたり深めたりする。
- ・にじみ、ぼかし、紙もみ手形、スパッタリング、マーブリング、指先ペインティング

6 年

5 年

心にひびく銀色の立体

III

アルミ板、針金、リベット、いもつち
砂袋、キリ、はとめ



- ・切りくず、切り残しの着目と保管。
- ・安全管理、騒音への配慮。
- ・参考作品や図の提示。



- ・吊る、ゲーム化する場所や見立てて遊ぶ時間の設定。
- ・特別な作業のための場所の設定。



- ・共同製作的活動への配慮。
- ・個別に発想の広がりや技術面の向上にむけた支援。
- ・製作カード、発表会で思いを深める。



- ・表現方法の組み合わせ
(切る、折る、折り重ねる、丸める、曲げる・・・)
- ・視点の多様化
(見立てる、向きを変える、組み合わせる)

III

画用紙、絵の具、スポンジローラー
筆、網、ブラシ、紙材、身辺材



- ・ローラーで着色する時にできるだけ色数を多く用意。



- ・着色する時の活動場所を広くとる。



- ・つかまえてみたいものを発表する。
- ・ローラーで着色した友だちの作品を鑑賞。



- ・ローラーやスポンジで自分の好きな色画用紙を作る。
- ・スパッタリングや点描などによる手形。
- ・つかまえてたい〇〇を自分なりの表現方法(平面・半立体・立体)で表す。

3 年

〇〇つかまえた!

IV 研究のまとめと今後の課題

1. 研究のまとめ

今年度の研究は、花を見て美しいと感じそれを表現していく行為を例にとって言えば、美しいと感じる感覚と、それを表現に具現化していくうえでの造形的思考過程に焦点を当てた研究であったと言える。すなわち、人間が本来もっている美意識（色・形・構成・質感・量感…等）を大切に、感覚を手がかりに感性を磨いていこうとする研究と、子どもの多様な造形的思考をどう感じ取り、どう理解しながら支援していくかの研究であった。その結果次のようにまとめた。

A分科会「子どもの多様な感覚を呼び起こす題材の工夫」

- ・子どもたちが、見たり触ったりする直接体験を重ねるなかで造形意欲や表現の広がりが生まれてくるような題材の工夫を検討した。
- ・見ることや触れることで感覚を呼び起こす手立てとして様々な素材を取り上げ、吟味することと、授業のなかでの児童の活動の拡大の方法について工夫した。
- ・子どものなかに、もっと試してみたいという気持ちや意欲の持続、形や色への新鮮なとらえ直しなどの変化を感じることができた。

B分科会「子どもの多様な思いを生かす指導法の工夫」

- ・個々の表現の思いに合わせた材料・素材や表現方法の選択能力を身に付けさせるような工夫をした。
- ・子どもの思いに添った満足した活動ができるような創造スペース（体育館・窓ガラス・校庭等）を工夫した。
- ・製作カード等を通して子どもの心の変化の過程をつかみ、共感的な支援に努めた。
- ・鑑賞会や評価家カード等で自他の作品を認め合い、子どもが共に学び合って表現の幅を広げていけるような場の設定を試みた。
- ・子どもたちの活動に自信と意欲が感じられ、発想の広がりが見られた。

2. 今後の課題

子どもたちの思いは、多種多様であり、いろいろななかかわりのなかで、広く、深く変容していく。私たちは、造形を通じた自然・素材・人間とのかかわりのなかで、子どもたちが自己を客観的に認識する力や、他者理解のため感性を身に付けることを望んでいる。そして、自分の思いを深め、生きる喜びを実感していく児童の育成を目指している。そのために子どもの造形意欲が高められるような題材の設定や指導と評価の在り方をさらに研究していかなければならない。そして図画工作のあるべき姿を追求していきたい。